

# 「海の京都」を巡るための文献研究の記録（第1報）

—丹後半島全般，京都丹後鉄道，与謝野町—

香川貴志<sup>\*1</sup>

General Articles and their Abstracts for the Summer Excursion  
in Umi-no-Kyoto (Part 1)

—Tango Peninsula, Kyoto Tango Railway and Yosano Town—

Kagawa Takashi

**抄録**：本稿は、2022（令和4）年度の前期集中講義として実施した学部開設科目「地理学研究」、大学院教育学研究科開設科目「地理学特論Ⅰ」、連合教職大学院開設科目「社会科教育実践研究—地理—」の事前学習において実施した文献研究の記録である。本稿には、事前学習のアウトライン、そこで取り組んだ地形図読図の一部、事前学習で課題とした文献要旨を収めている。対象となる文献数が全部で68本と多いため、本稿（第1報）には、文献の検索とその方法、文献要旨をまとめる担当者の決定、与謝野町加悦地区の地形図読図問題、そして文献要旨（丹後半島全般6件、京都丹後鉄道4件、与謝野町9件）を収めた。残り49件（宮津市12件、伊根町5件、京丹後市18件、舞鶴市14件）については、大部分が文献要旨からなる本稿の第2報（香川、2023a）に、また授業全体の流れと現地授業に関しては香川（2023b）にまとめた。

**キーワード**：事前学習，文献研究，丹後半島，京都丹後鉄道，与謝野町

## I. 地域調査における文献研究の意義と文献の選定

本稿は、学術研究論文ではなく授業実践記録である。したがって、抄録で述べた授業のうち、現地授業に先立って実施した事前学習会で得た成果の記載が中心となっている。本章では、地域研究や特定地域の訪問のために当該地域に関する文献研究がいかなる意義を持つのか、また文献をいかにして選定したのかについて述べる。本稿で対象とするのは、京都府観光連盟が定めた京都北部地域「海の京都」に属する市町のうちの3市2町（舞鶴市、宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町）である。

### 1.1 地域調査における文献研究の大切さ

筆者が専門領域にしている地理学に限らず、地域経済学や地域社会学、さらに工学系の都市計画学や地域計画学など、フィールドに立つ時間の多寡こそあれ、何らかの地域調査を要する学問領域は多い。また、本授業科目を受講する学生たちの多くは、近い将来に初等教育教員あるいは中等教育教員として小学校各教科、中学校の会科や高等学校地理歴史科を担当することになる。

---

<sup>\*1</sup> 京都教育大学

こうした受講生たちの進路を視野に入れたとき、2020年に小学校で実施が始まった現行の学習指導要領が2022年に高等学校でも実施されるに至ったことを忘れてはならない。そこで謳われる「主体的・対話的で深い学び」という主題は、小学校社会科の大部分を占める地理的な領域、長らく必修である中学校社会科地理的分野、そして新たに必修科目として設けられた高等学校「地理総合」において、いずれも地域観察や地域調査を重視している。つまり、教師になって社会科や地理歴史科の教育活動に携わる限り、地域調査や地域研究は不可避な教科内容となる。

地域調査や地域研究では、事前に当該地域を様々な角度から学んでおくことが大切である。なぜなら、現実のフィールドに立った際に、初めて見た感動を味わえることはあっても、それは「綺麗だ」「凄い」「素晴らしい」「面白そうだ」などの心理的な感嘆からほとんど深まることがないからである。地域調査や地域研究を実施する地域の知識を当事者自身が身につけ、それを忘れ得ない地域特性として他者へ伝えるには、事前に当該地域に関する文献を精読し、学んだことを現地フィールドで確かめて「百聞は一見にしかず」と実感するのが最も効率的かつ効果的である。

本授業科目と類似科目（奇数年開講の「地理学研究」など）において、まだ学術論文の読解に慣れていない受講生にとっては酷といっても過言ではない文献精読、さらにキーワード選定や文献要旨の執筆を課してきたのは、上記のような根拠に基づいている。なお、過年度分の作業結果は、本誌『京都教育大学環境教育研究年報』のバックナンバー（香川、2015a；2015b；2016；2017a；2017b；2018a；2018b；2019；2020；2021；2022a；2022b）に収録されており、すべて機関リポジトリを介して無償ダウンロードできる。上記の各論文より後に公開された文献の要旨を利用者が適宜追加していけば、当該地域に関する研究資料のアップデートが可能である。本稿を当該地域のエクスカッションや地域調査で活用いただければ幸いである。

## 1.2 文献検索の方法、ならびに受講生数の確定を受けての文献選定の方法

本授業科目は、学生たちからの要望にも配慮しながら筆者が次年度の対象地域を徐々に絞り込み、毎秋10～11月には翌年度に現地授業を実施する地域が確定する。その直後からCiNiiを活用して対象地域に関する文献の検索とリストアップに着手し、年末年始の次年度シラバス執筆時には、初期段階の文献リストを筆者が完成させる。その際の検索語は、本稿の付録2および第2報（香川、2023a）の付録に記したとおりである。

その後、受講者が確定する新年度4月上～中旬頃まで収集すべき文献の情報収集を不断に継続する。これは、前年度秋季における文献検索では、前年内（今回の場合は2021年12月まで）に刊行された文献のうち、とくに刊行日が前年10月以降の文献が遺漏してしまうからである。とはいえ、前年度内（今回の場合は2022年1～3月）に刊行された文献は捕捉できないことが多いため、後述する文献精読担当者を決めた後も筆者は情報収集に努めている。

上に記したように、当初リストアップした文献は絞り込みを行う前のものであるため、その数はおびただしい数に達する。今回の対象地域では概ね2000年以降の文献に限っても、地理学と関連性が深いと考えられる文献が約130件に及んだ。このリストを保全した状態で、本授業科目の受講希望者がどれくらいになるのかを待つことになる。前年度末（今回は2022年3月末）に在学生の受講登録が始まり、新入生の受講が無い本授業科目は4月上旬にはおおよそその受講生数が判明する。ただ、近年は受講希望者が多くなりがちで、今回もシラバスに記載していた20人（学部

開設科目の「地理学特講」の定員枠は短時間で満員になった。

ところが「どうしても受講したい」との希望が4月上旬の受講相談期間中に数名の学生から寄せられた。そこで、宿泊を予定している地域の宿泊施設の規模などを考慮しつつ、教務課へ依頼して一時的に受講登録システムの人数制限を解除してもらった。その後、受講相談にきた学生たちの他からも若干の希望者が出て、最終的には学部・大学院（教職大学院）を合わせて31名の受講生が集まった。

ここまでの段階でリストアップされている文献は約130件のままである。ただ、受講生に文献精読作業（キーワード選定と文献要旨執筆）を課しても、その仕上がりは玉石混交である。また、長編の文献や専門性が極めて高い文献は、とくに受講生の大部分を占める学部学生には荷が重いことが懸念される。そこで、こうした「難物」の文献は筆者が文献精読に励むことにして、それ以外の文献を受講生に分担してもらうことになる。文献要旨の仕上がりには巧拙があるので、文献1本あたり最低で2名の担当を割り振る方針のもと、「何本の文献に絞り込むか」という作業に進む必要がある。今回は頁数が10頁以上という条件を設けて文献の絞り込みを図った。その結果、受講生数が確定した時点での対象文献数は68件となった。

## II. 文献精読担当者の割り振り

第1回事前学習会の直前の受講生は、学部30名と大学院1名の計31名となった。この人数の受講生全員に対して「文献精読に関わる学びの質」を高めるため、次に記す5つの方針を立てた。

- ① 受講生全員が可能な限り各訪問予定地（京都府の市町村コード順に列挙すると、舞鶴市、宮津市、京丹後市、伊根町、与謝野町）の文献に触れられるよう配慮する。
- ② 頁数が多い文献や専門性が高過ぎる文献は筆者が担当し、受講生の負担を軽減する。
- ③ 各々の文献は、筆者が担当するものを除いて最低2名で担当するが、キーワードと文献要旨をまとめる作業は各自が行い、共同担当とはしない（共通の文献要旨にしない）。
- ④ 無償ダウンロードが不可能で取寄せを要する文献を全員が担当し、本学の附属図書館のシステムを経由して文献収集をする技能を身に付けさせる。
- ⑤ 受講生の担当文献数は同一とし、担当頁数に大きな差を生じないよう配慮する。

上記①～⑤の方針に従って作成した文献分担表が次頁から見開きで示した表1である。受講生各自が担当する文献は、上記の方針①～⑤にしたがって筆者がグループ化（割り振り）しておき、それを第1回事前学習会（2022年4月23日（土））で受講生各自による相互調整のうえ選んでもらった。筆者は文献をグループ化する際に次のように留意した。

まず方針①については、訪問予定自治体5市町の20頁以下の文献のうち、筆者が地域の実情を把握するのに好適であると判断した文献を全員で担当することにした。このうち宮津市についての文献は入手が難しい（筆者の研究室に所蔵）のため、複写のうえ簡易製本したものを第1回事前学習会の際に受講生へ配布した。





表1 文献精読のための分担割り振り表（つづき）

番号	所蔵	頁数	香川	M01	M02	M03	M04	M05	M06	M07	M08	M09	M10	M11	M12	M13	M14	M15	M16	M17	M18	M19	M20	M21	F01	F02	F03	F04	F05	F06	F07	F08	F09	F10		
K06	Re	12											★		★			★																		
K07	Re	18		★	★																							★								★
K08	IR	13																	●						●											●
K09	IR	16																								●	●				●					
K10	IR	23	●																																	
K11	JS	15	●																																	
K12	Re	25	★																																	
K13	Re	10					★				★							★							★											
K14	IR	19							●						●	●																				
K15	Re	12						★									★						★													
K16	IR	43	●																																	
K17	Re	10				★			★	★					★																				★	
K18	Re	11												★												★				★						
I01	Re	11											★		★																					
I02	JS	14	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
I03	JS	11													●										●			●								
I04	Re	10		★	★																							★								★
I05	Re	24	★																																	
Y01	JS	14									●														●										●	
Y02	IR	27	●																																	
Y03	IR	14																								●	●			●						
Y04	IR	33	●																																	
Y05	IR	24	●																																	
Y06	IR	14	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
Y07	IR	21	●																																	
Y08	IR	24	●																																	
Y09	IR	44	●																																	
担当		7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
頁数		5	3	3	3	3	3	2	3	3	3	2	2	2	3	2	2	3	2	2	3	3	3	3	3	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	
		1	1	4	4	0	3	7	2	1	4	7	9	9	2	7	7	4	9	9	1	0	1	2	9	1	1	2	9	0	1	0	2			

表中の凡例

【対象地域またはテーマ，および地域またはテーマごとの通し番号】

P: 丹後半島, R: 鉄道交通, A: 舞鶴, M: 宮津, Y: 与謝野, I: 伊根, K: 京丹後

【(文献の)所蔵】

- IR 発行機関のリポジトリからダウンロード可能
- JS J-Stageからダウンロード可能
- LB 附属図書館で所蔵
- Kg 香川研究室で所蔵
- Re 附属図書館経由で他機関から複写物取寄せ

【各々の担当文献の入手方法】

- 各文献の担当者がPC経由で入手できる文献
- ★ 各文献の担当者が他機関から入手する文献
- ◇ 第1回事前学習会で受講生に配布する文献

方針②に関しては、地理学が専門領域ではない者が大勢を占めること、本格的な文献研究の経験に乏しい3回生が多く含まれることなどに配慮して、21頁以上の文献は筆者が担当した。また、筆者の研究室で所蔵している入手困難な文献、各担当者の負担均等化の際に組み込めなかった文献も筆者が担当した。方針③は受講生数が相応に多かったため難なくクリアでき、受講生が精読する各文献は3～5名の担当者を配属できた。方針④については、発注の方法を第1回事前学習会で説明し、早目に発注するよう指示した。方針⑤に関しては、相当な時間を要したが、各文献の所蔵先と頁数を並べ替える作業を重ね、第1回事前学習会に間に合うよう担当文献のグループ（表1における各列が受講生各自の担当する文献になっている）を完成させることができた。

結果として、受講生各自が担当する文献数は、全員で担当する文献が5件、各自が担当する文献が4件となり、合計件数の統一を実現できた。各自の担当分のうち2件は無償ダウンロードが可能で、残り2件は附属図書館経由で他機関からの取り寄せを要する文献である。受講生各自の負担頁数は、表1に示したように127～134頁となり、概ね揃えることができた。他方、頁数の多い文献が多数あったため、筆者が担当する文献は32件、合計頁数は751頁に達した。本稿および姉妹編である第2報（香川、2022a）の双方に格納した付録の文献要旨がすべて筆者による推敲を経たものであることと併せると、今年度の文献研究における筆者の負担は決して軽いものではなかった。

### Ⅲ. 文献精読、精読後のキーワード選定および文献要旨について

第1回事前学習会を2022年4月23日（土）に開催し、受講生各自が精読を担当する文献を決めた。前章に記したように、受講生各自が9本の文献を精読してキーワード選定と文献要旨の執筆を行うのが事前学習の主軸となる課題である。しかし、この作業には相応の時間を要することが従来の経験でわかっていたため、当初より第2回事前学習会を7月2日（土）に設定して、やや長めのインターバルを確保した。教職大学院の学生（現職教員）が1名含まれており、教職大学院の授業は指定時間に実施する必要があるため、当該大学院学生と相談して授業実施日は指定開講日と学部開設科目「地理学特講」のいずれかから勤務の都合で選んでもらうようにした。

当該大学院学生を含むすべての受講生には、6月30日（木）の23:55をタイムリミットとして精読を担当する文献のキーワードと文献要旨を後述するテンプレート上にまとめ、それをEメール添付で提出させることにした。その際、筆者が提出物を整理しやすいように、Eメール送信には学籍番号が即座に分かる大学公式メールアドレスを使うこと、キーワードと文献要旨をまとめたテンプレートのタイトルは「学績番号+氏名（文献要旨）」にすることを指示した。

この作業のためのテンプレートは、本稿および姉妹編（香川、2023a）の付録と同じ様式である。そして、このテンプレートは第1回事前学習会において「一両日中に教務システムから送信するので、すぐにダウンロードして原本をUSBメモリやサーバーに保存しておくこと」と伝え、翌日の4月24日に受講生へ向けて送信した。第1回事前学習会では、作業を進める際にキーワードは最大で7語とし、可能な限りテンプレート上で1行に収めるよう指示した。文献要旨については、テンプレートの「Abstract:」に続けて記し、必ず5行に仕上げるとの条件を付けた。すなわち、文献要旨の字数はすべてを全角文字で記した場合、188字以上、235字以下となる。

こうした厳格な字数制限は、実施年度に応じて字数に若干の違いはあるが、以前から設けていた。

それは近い将来に受講生が教職へ就いた際の「学級だより」や「学年だより」などの字数制限が厳しい文書作成を想定しており、こうした場面で難なく文書作成ができるよう鍛錬を重ねてもらうためである。

文献要旨の執筆とあわせて課した各文献のキーワード選定は、近年の学術研究論文では普遍化している。それを踏まえて、地理学研究室では卒業論文や修士論文にキーワードを記載することを義務付けている。今後は社会領域専攻内の他の研究領域でもキーワードの記載が義務付けられる可能性が高い。つまり、キーワードを選定するという課題は、自らの論文にキーワードを添えることを視程に収めれば、絶好の練習機会とみなすことができる。また、キーワードには汎用的または限定的に過ぎるものは適さないことを野間ほか（2017）の記載に準じて伝えた。

もっとも、査読制をとる学術専門雑誌では、当初からキーワードを記載している文献も珍しくない。こうしたケースでは、当該文献に記載されているキーワードの流用を認めた。ただし、筆者がCiNiiで文献検索をした際に使った検索語が当該論文のキーワードになっていることも相応に多い。そこで、キーワード選定の際には、情報が重複することを避けるため、筆者がCiNiiで文献検索をした際に使った検索語はキーワード選定の際に除外しておくよう指示した。

この事前学習課題が6月30日に締め切られてから第2回事前学習会までは中1日しかないため、早期に提出されたものから筆者が逐次推敲し、キーワードと文献要旨を整えた。ただ『文献要旨集』は第2回事前学習会には間に合わず、第3回事前学習会で配布した。それをもとにして現地授業で提出してもらい宿題を課した。第2回事前学習会では、香川（2023b）で詳述する地形図読図に取り組んでもらった。

地形図読図は、事前に訪問地域の予察として意義があることに加え、近年の教員採用試験や大学入学共通テストでも頻出するため、事前課題としての価値が高い。本稿には付録1として与謝野町加悦地区の「ちりめん街道」周辺の模擬問題とその解説・解答を図1・表2として載せた。この模擬問題は、最近の大学入試や教員採用試験で頻出する新旧地形図を活用した設問形式を少しアレンジして、最新の観光マップと旧版地形図を組み合わせたユニークなものにした。

現地訪問前の最終となる第3回事前学習会（2022年8月6日）では、第1回事前学習会の直後に刊行された550頁に及ぶ大著で、丹後半島の廃村に関する詳細な考究を多く含む坂口（2022）『廃村の研究—山地集落消滅の機構と要因—』の成果を、同書の目次の抄録を参照しながら紹介した。坂口氏は本学を2001年3月に定年退職した京都教育大学名誉教授であり、廃村研究をライフワークにしている。加えて同氏は、本誌の発行機関である京都教育大学附属環境教育研究センターのセンター長を務めた経験もある。その大作を丹後半島に関わる授業で活用できたことで、筆者はかつての上司から今回のエクスカッションを見守られているような気持ちになった。

ところで、本稿には今回の訪問地域のうち、丹後半島全域または丹後半島の複数地域を対象とした文献6件、京都丹後鉄道（旧・北近畿タンゴ鉄道に関する文献4件、与謝野町を対象とした文献9件、以上の合計19件の文献要旨を付録2として格納した。残り49件の文献については、香川（2023a）に付録として収めている。

なお、文献要旨（本稿の付録2）をまとめる素材となった文献類は、情報の重複を避けるため、本稿の参考文献欄には掲出していない。これは本誌掲載の本稿第2報（香川，2023a）でも同様である。本授業科目に関わるコース立案、シラバス執筆、受講生募集、事前学習及び現地授業、そ

して成績評価に至るまでの備忘録は本誌所収の香川（2023b）にまとめている。

## 引用・参考文献

- 香川貴志（2013）東日本大震災を受けての防災教育普及のための取組—さまざまな論考の整理と三陸地域での現地検証—。『京都教育大学紀要』, **123**, pp. 31-45.
- 香川貴志（2015a）阪神・淡路大震災20周年を機会として復興と防災・減災について考える（第1報）。『京都教育大学環境教育研究年報』, **23**, pp. 7-15.
- 香川貴志（2015b）阪神・淡路大震災20周年を機会として復興と防災・減災について考える（第2報）。『京都教育大学環境教育研究年報』, **23**, pp. 17-25.
- 香川貴志（2016）懐かしさを感じる街を歩くための事前学習の記録—門司港レトロ, 豊後高田「昭和の町」, 別府温泉郷を事例として—。『京都教育大学環境教育研究年報』, **24**, pp. 1-14.
- 香川貴志（2017a）飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習の記録（第1報）。『京都教育大学環境教育研究年報』, **25**, pp. 31-44.
- 香川貴志（2017b）飛騨市・高山市・富山市をめぐるエクステンシブ型フィールドトリップの事前学習の記録（第2報）。『京都教育大学環境教育研究年報』, **25**, pp. 45-66.
- 香川貴志（2018a）三陸地域で防災・減災教育を学ぶ—その事前学習における文献研究—（第1報）。『京都教育大学環境教育研究年報』, **26**, pp. 25-37.
- 香川貴志（2018b）三陸地域で防災・減災教育を学ぶ—その事前学習における文献研究—（第2報）。『京都教育大学環境教育研究年報』, **26**, pp. 39-46.
- 香川貴志（2019）重要伝統的建造物群保存地区を学ぶための基礎文献と地形図読図課題—愛媛県西予市卯之町および喜多郡内子町の場合—。『京都教育大学環境教育研究年報』, **27**, pp. 53-64.
- 香川貴志（2020）福島県内の重要伝統的建造物群保存地区および会津若松に関する基礎文献とその要旨。『京都教育大学環境教育研究年報』, **28**, pp. 53-64.
- 香川貴志（2021）重要伝統的建造物群保存地区を活用した教材作成のための事前学習の記録—中山道妻籠宿, 奈良井宿, 木曾平沢に関する文献研究—。『京都教育大学環境教育研究年報』, **29**, pp. 1-12.
- 香川貴志（2022a）出雲大社, 石見銀山, 萩と津和野を巡るための文献研究の記録（第1報）—最近刊行された対象地域の地理学関連文献の要旨—。『京都教育大学環境教育研究年報』, **30**, pp. 57-72.
- 香川貴志（2022b）出雲大社, 石見銀山, 萩と津和野を巡るための文献研究の記録（第2報）—最近刊行された対象地域の地理学関連文献の要旨—。『京都教育大学環境教育研究年報』, **30**, pp. 73-86.
- 香川貴志（2023a）「海の京都」を巡るための文献研究の記録（第2報）—舞鶴市, 宮津市, 京丹後市, 伊根町—。『京都教育大学環境教育研究年報』, **31**, pp. 55-69.
- 香川貴志（2023b）京都府北部地域の再発見—「海の京都」を巡る2022（令和4）年度「地理学特講」の覚え書き—。『京都教育大学環境教育研究年報』, **31**, pp. 71-85.
- 坂口慶治（2022）『廃村の研究—山地集落消滅の機構と要因—』海青社。
- 野間晴雄・香川貴志・土平 博・山田周二・河角龍典・小原文明（2017）『第2版 ジオ・パルNEO—地理学・地域調査便利帖—』海青社。



付録1

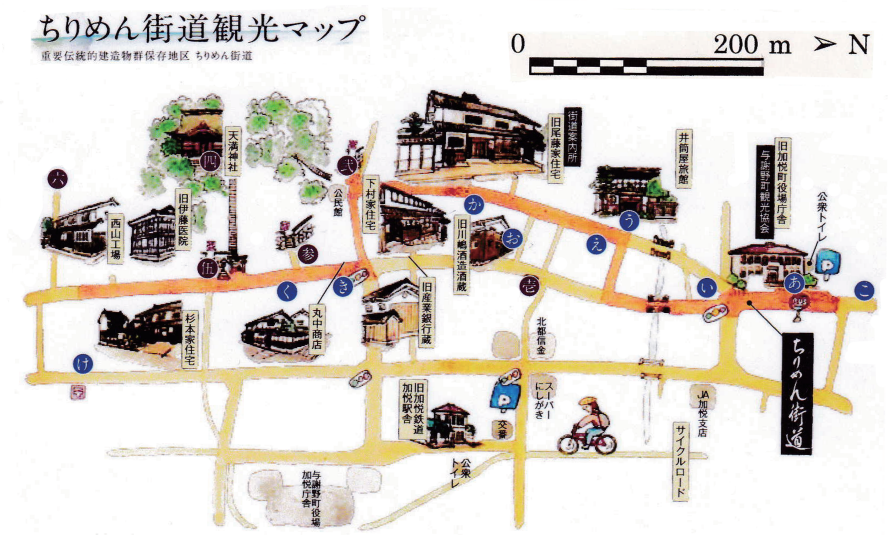


図1 与謝野町加悦地区「ちりめん街道」の1/25,000旧版地形図と最新観光マップ  
上図：1/25,000地形図「四辻」（1979年2月28日発行），同「大江山」（1978年5月30日発行）  
下図：ちりめん街道観光マップ <https://yosano-kankou.net/chirimenkaido/images/kaidomap/kaidomap.pdf>（2022年5月12日閲覧）

模擬問題1

図1に示す与謝野町加悦地区「ちりめん街道」の1/25,000地形図（1978年及び1979年発行）と最新の観光マップ（上側の地形図に合わせて原版の方向を回転させている）を比べる作業で得たことがらを次の①～④に列挙した。説明が正しいものを①～④のうちから1つ選び、各々の選択肢についての正誤判断理由を①～④のすべてについて述べよ。

- ① この地域の鉄道は自家用車の普及や貨物輸送の衰退によって現在は廃止されている。
- ② 1978年及び1979年当時の鉄道は、主に集落の南側にある農地の中に敷設されている。
- ③ この地域の特産品の「ちりめん」を生産する産業の原料は宮津湾で獲れる小魚である。
- ④ 観光マップの旧役場と地形図の役場の位置は、いずれかの地図で誤って記載されている。

表2 地形図読図の模擬問題における各選択肢の解説例と解答

## 解説

近年における地形図読図の設問は、この模擬問題のようにイラストを伴った観光マップが稀に用いられる。こうした観光マップは縮尺が表現されていない、観光コースとは縁の薄い道路の一部が省かれるなどの特徴がみられることもある。しかし、現実の地域における道路パターンや相対的な距離の長短が著しく歪められることはほとんどない。観光マップは私たちの生活でも多用されるので、それが地形図ではどのように表現されているのかについて、注意深く比較作業をする楽しさを存分に味わってほしい。

- ① ここで説明されているのは、現在の京都丹後鉄道与謝野駅（旧・国鉄宮津線丹後山田駅）から加悦町（現・与謝野町）加悦駅までを結んでいた加悦鉄道である。人口密度が低い地方では、公共交通の利便性が低いため自家用車の普及が早期より進み、それが利用客の減少に拍車をかけるという「負のスパイラル」を生じることが多い。加悦鉄道は、旅客輸送の終点であった加悦駅から南へとニッケル鉱石を運搬する貨物線も有していたが、これも国鉄宮津線の貨物取扱の廃止に伴って撤退を余儀なくされ、1985年その歴史に幕を下ろした。正しい記述なので、これが正解となる。
- ② 選択肢の説明文から、ここは地形図だけをみて正誤判断に臨めることがわかる。鉄道敷設に際しては、大規模な用地買収や立ち退きを避けるため、土地の所有状況が市街地ほど複雑ではない農地が鉄道路線に転用されることが多い。この記述は正しいのだが、鉄道は主に集落の東側に敷設されており、南側には敷設されていない。観光マップでは旧加悦駅舎が集落の下側に描かれているので、早合点してしまうと、鉄道が集落の南側に敷設されていると間違えてしまう。誤った記述なので、この選択肢は正解にはならない。
- ③ 与謝野町加悦地区を含む丹後半島の平地部で著名な「ちりめん」製造業は魚を加工する食品工業ではなく、縮緬（ちりめん）と記す絹織物を製造する繊維工業である。丹後半島一帯では平地部に立地した「ちりめん」生産工場に周辺の農山村から農閑期に多くの労働力が集まり、それがやがて通年での兼業化や挙家離村を促す素地となった。この選択肢は「ちりめん」の解釈を誤っているので正解には選べない。
- ④ 観光マップと地形図では、道路形状をもとに比較すると役場の位置が異なっているようにみえる。旧加悦町役場は観光マップに記された位置にあったが、地形図の役場の位置は誤っているわけではなく、仮に正しい位置に記すと小学校の校地の南東端に位置してしまうため、地図記号が見出し難くなる。そこで、地図記号の位置を少しだけ南側に移動させた地図表現技法が用いられている。このような処理は「転位（てんい）」と呼ばれ、市街地では決して珍しいものではない。少し慣れてしまえば、地形図の役場の記号が市街地を示す斜線（こうした市街地の表現を「総描（そうびょう）」と呼ぶ）から少しズレて道路上にはみ出しているのので、ここで転位が施されていることを推定できる。誤った説明なので正解にはできない。

解答：①

\*受講生による解答状況についての解説は香川（2023b）に掲載。

\*次頁より付録2として文献要旨を掲出。



## 付録2（事前学習で扱った文献の要旨）

★ COVID-19 対応のため、原則的に本学所蔵資料、J-STAGEやIR（機関リポジトリ）で無償ダウンロード可能な文献（一部は他機関からの取り寄せを要する文献も含む）について受講生が要旨をまとめ、それを香川が推敲のうえ整えた。無償ダウンロードができない文献の約半数及び頁数が多い文献、本文が英語で表記された文献については、受講生の負担が過重になることに配慮して香川が要旨をまとめた。なお、各文献のコード番号に添えたアルファベット2文字は文献入手に関わる情報で次のような意味がある。

IR：機関リポジトリで入手可、JS：J-STAGEで入手可、LB：附属図書館で所蔵、Kg：香川研究室で所蔵、Re：附属図書館経由で他大学等から取寄せ。

市町村スケールでの文献検索では捕捉され難い、「丹後半島」あるいは「丹後地域」で検索してヒットする2000年以降発行の10頁以上の文献を取り上げた。純粋に自然科学的なものや工学的な文献は割愛したが、自然地理学的な視座による文献は含めている。また、1999年以前については上記の語で検索してヒットした地理学分野の査読付き雑誌に掲載された文献、京都教育大学の学内紀要に掲載された文献を選出した。なお、「丹後」「丹後地域」「丹後地方」「丹後半島」は、下記の文献要旨におけるキーワードから割愛している。

### ▼ P01 JS, 10p.

**Reference**：石田志朗・小滝篤夫・糸本夏実(2019). 京都府，丹後半島の海成段丘堆積物. 地球科学, **73**(4), 195-204.

**Key Words**：海岸段丘，段丘堆積物，汀線，粒度分析，インプリケーション，MIS5e，海水準変動

**Abstract**：本論文では、先行研究の乏しい丹後半島の中段段丘を構成する海成段丘堆積物の分析から、堆積環境の推定や海水準変動の過程が論じられている。著者らは、京丹後市の4地点の露頭を対象とした観察や砂礫の粒度分析、更に京丹後市丹後町上野地区の巨礫層における礫の流向の計測と画像解析を実施した。その結果、堆積環境は海進により前浜から外浜へ、後の海退により前浜、後浜、砂丘へ移り変わることで、本露頭の海成段丘堆積物はMIS5e以降にあった一度の海水準変動により形成されたことが明らかとなった。

### ▼ P02 IR, 15p.

**Reference**：岡本正志・田中里志・石川 誠・梁川 正・安松貞夫・清水 睦(2012). 環境教育に関する教員研修プログラムの開発—丹後半島での試み—. 京都教育大学環境教育研究年報, **20**, 35-49.

**Key Words**：環境教育，プログラム開発，教員研修，地域連携，海と星の見える丘公園

**Abstract**：京都教育大学とNPO法人デザインスクールとの間で、環境教育に関する教材開発や人材育成に関する協定を結び、京都府立「海と星の見える丘公園」をフィールドとしてプログラムを共同開発し、教員研修プログラムが試行実施された。本稿は、その共同研究について報告したものである。研修では、地球史を基盤として地球環境を考える「46億年・地球の道」、宮津花崗岩を用いた岩石標本作製、琴引浜への漂着物の学習、演劇的手法によるコミュニケーション力養成などを実施し、一定の成果を得ることができた。

### ▼ P03 LB, 10p.

**Reference**：小泉武栄(2012). 観光地の自然学(16) 丹後半島—玄武洞・琴引浜・天橋立・大江山観光名所を自然学で読み解く—. 地理, **57**(12), 6-15.

**Key Words**：丹後天橋立大江山国定公園，久美浜湾，琴引浜，鳴き砂，柱状節理，舟屋，天橋立

**Abstract**：本稿は、丹後天橋立大江山国定公園とその周辺にみられる自然・人文景観について平易に解説したもので、当地を概観するのに好適な記事である。当欄では記事のうち丹後半島の主要部に関するものをクローズアップして紹介する。汽水湖として知られる久美浜湾，鳴き砂で知られる琴引浜，柱状節理として著名な立岩，舟置き場を内包した珍しい家屋群からなる伊根町の舟屋，当地最大の観光地である天橋立などが簡潔にテ

ンボ良く紹介されている。咀嚼された専門知識を楽しみながら理解できるのが嬉しい。

▼ P04 JS, 40p.

**Reference** : 坂口慶治 (1966). 丹後半島における廃村現象の地理学的研究. 人文地理, 18(6), 603-642.

**Key Words** : 廃村, 挙家離村, 商品経済化, 海拔高度, 社会・経済的構造

**Abstract** : 本研究は丹後半島における廃村現象を自然・人文の両側面から時系列的に精査した大作である。離村は明治中期から始まり、自足的な生活が商品経済的になるにつれ加速された。当初は生活困窮度の高い人々が離村し、のちには中産階級の離村も多くなった。また廃村現象は、海拔高度が高い地区や起伏量が大きい地区ほど早く始まったが、海拔高度が低くても谷筋の奥地などでは廃村化が早かった。こうした状況は、各地域の社会・経済的構造と密接に関連するが、交通条件が良くなったことで廃村が促された例もある。

▼ P05 IR, 32p.

**Reference** : 坂口慶治 (1998). 丹後地方における廃村の多発現象と立地環境との関係(その1)―地形的・地質的条件との関係―. 京都教育大学環境教育研究年報, 6, 51-82.

**Key Words** : 廃村, 過疎, 山村, 立地環境, 地形的条件, 地質的条件

**Abstract** : 自然地理学的な観点を廃村という人文的な現象の分析に取り込んだ斬新な研究である。丹後半島は中低山性山地であるものの、地形的にみれば急傾斜が目立つ多数の山地塊からなっており、それが多くの小規模集落を分散立地させていた。地質的にみても多種類の地層が錯綜して分布しているため、これが多様な小規模集落が分散立地する基盤となった。このように多彩な自然地理学的環境の分布構成が各集落の社会経済的な脆弱さを促すこととなり、丹後半島を全国屈指の廃村多発地域へと導くこととなった。

▼ P06 JS, 22p.

**Reference** : 高橋達夫 (1970). 丹後半島における挙家離村と機業. 人文地理, 22(4), 454-475.

**Key Words** : 挙家離村, 農村工業地域, 機業, 農業生産条件, 共同組織

**Abstract** : 本研究は、高度経済成長期に丹後半島内陸の山間部で多発した挙家離村の要因について、平野部の農村工業地域における機業(丹後縮緬)の発展との関係から追究したものである。挙家離村が生じやすい集落は、役場・学校・医療施設からの距離が遠く標高の高い積雪山間部という厳しい農業生産条件のもとにあり、離村が始まって集落内の戸数が減少すると共同体組織が崩壊して加速度的に離村が促される。さらに、主な離村先の機業地域で就業先や住居の斡旋があれば、このことも大きな挙家離村の促進要因となる。

丹後半島のほぼ全域をカバーする地域交通機関としての鉄道について「京都丹後鉄道」「北近畿タンゴ鉄道」で検索してヒットするもののうち、10頁以上の文献を取り上げた。また、立命館大学が地域経済学的な観点から1990年代初期に丹後半島で実施した地域調査報告を含めた。なお、「鉄道」「京都丹後鉄道」「北近畿タンゴ鉄道」は、下記の文献要旨におけるキーワードから割愛している。

▼ R01 Kg, 12p.

**Reference** : 香川貴志 (1992). 北近畿タンゴ鉄道と丹後リゾート構想. 京都地域研究, 7, 75-86.

**Key Words** : 第3セクター鉄道, 列車ダイヤ, 丹後リゾート構想, 新造車両, 直通列車

**Abstract** : 第3セクター鉄道としての北近畿タンゴ鉄道(2022年4月1日現在は京都丹後鉄道)の開業に至る沿革の記述から本稿は始まり、国鉄宮津線時代との列車本数や所要時間、さらに新旧運賃の比較など多種の分析が施されている。ごく一部の区間を除き、運賃は若干値上がりしたものの、列車本数が増加して所要時間は短縮されるなど、第3セクター化の効用が随所に認められる。新造車両の導入で快適性の向上も図られ、京都駅や大阪駅への直通列車の設定など、丹後リゾート構想を支える積極的な運営も注目される。

**▼ R02 Re, 18p.**

**Reference** : 小松正史 (2017). 鉄道のサウンドブランディング戦略 (1)―京都丹後鉄道における音環境デザインの実践報告―. 京都精華大学紀要, **51**, 85-102.

**Key Words** : サウンドブランディング, 音環境デザイン, 駅メロ, 公共空間

**Abstract** : サウンドブランディングとは、音を戦略的・戦術的かつ俯瞰的に使うことで、目に見える成果を得ようとするマーケティングの一手法である。本鉄道をはじめとした公共空間に音的アイデアを加味することによる、サウンドブランディングを構築する可能性を追究し、京都丹後鉄道を事例にして、駅メロや環境音、アンセム等を通してサウンドブランディングの実践内容が紹介されている。また、京都丹後鉄道の路線図や周辺地域での録音風景等の写真が示され、同社が工夫を凝らした営業戦略の一端を理解できる。

**▼ R03 Re, 12p.**

**Reference** : 鈴木文彦 (2009). 地方鉄道レポート (56) 北近畿タンゴ鉄道. 鉄道ジャーナル, **43**(1), 68-79.

**Key Words** : 宮津線, 赤字経営, 第三セクター鉄道, 5か年計画, 地理的状況

**Abstract** : 本論文は、転換第三セクター鉄道の中にあつて最高額の赤字を抱えて運営されている北近畿タンゴ鉄道（現・京都丹後鉄道）の赤字経営からの脱却に向けた努力を紹介している。同社の取組として、5か年計画が紹介されている。その目標として、安心安全な運行、魅力的な鉄道づくり、持続可能な経営スキームの構築が列挙されている。これらの他にも、北近畿タンゴ鉄道の歴史や営業方針、列車の運行体制、ダイヤ編成や鉄道車両、利用実態、沿線の地理的状況と人の流れ等が鉄道趣味の域に留まらず紹介されている。

**▼ R04 Re, 11p.**

**Reference** : 鈴木文彦 (2015). 第3セクター地方鉄道のその後 (18) 京都丹後鉄道. 鉄道ジャーナル, **49**(10), 150-160.

**Key Words** : 第3セクター鉄道, 上下分離, 宮福鉄道, 沿線地域, 企画乗車券

**Abstract** : 第3セクターとして営業されている京都丹後鉄道の操業から現在、更に今後を上下分離の経緯や新会社の考え方、施策の観点から整理した文献である。宮福鉄道から北近畿タンゴ鉄道を経て、現在に至るまでの再構築過程では様々な営業施策が実施された。今後の京都丹後鉄道は、地域密着型の鉄道として上下分離を徹底した営業戦略に則り、「海の京都」に指定された沿線を地域資源と捉えている。利用促進策として、今後はバス・タクシーとの一層の接続改善、バリアフリーの徹底や企画乗車券の充実が期待される。

「与謝野町」で検索してヒットするもののうち、地理学に関連が深いと考えられる2010年以降に発行された10頁以上の文献を選別した。純粋に自然科学的なものや工学的な文献は割愛したが、自然地理学的な視座による文献は含めている。ただし、内容が類似していると考えられる文献は新しい方を優先した。なお、「与謝野」や「与謝野町」は、下記の文献要旨におけるキーワードから割愛している。

**▼ Y01 JS, 14p.**

**Reference** : 一井 崇 (2020). ユニバーサルツーリズムの新たな視点と地域形成における障害者雇用の役割―京都府与謝野町「よさのうみ福祉会」の障害者雇用・就労支援事業を通じて―. 観光研究, **31**(1), 19-32.

**Key Words** : よさのうみ福祉会, ユニバーサルデザイン, ユニバーサルツーリズム, 障害者雇用, 就労事業

**Abstract** : 与謝野町を事例とした本研究は、観光事業の中で障害者が就労支援事業を通して地域社会に近接化し、地域形成の担い手として福利厚生や観光振興に貢献する事例を詳述している。この観光事業は障害者雇用という側面に留まらず、行政のシステムに着目しても部署横断的な連携を活発にする契機となり、民間の観光事業者の積極的な関与や参入を促進する基盤が整った。1990年代から社会で認識されるようになったユニバーサルデザインの観点に立てば、本稿は誰も取り残さない持続可能な社会の可能性を示唆している。

**▼ Y02 IR, 27p.**

**Reference** : 加賀爪優 (2013). 京都府与謝野町の地域産業連関表の作成と地域振興計画の波及効果. 生物資源経済研究, **18**, 15-41.

**Key Words** : 産業連関表, ノン・サーベイ法, 影響力係数, 適応度係数, 生産誘発効果, 付加価値誘発効果

**Abstract** : 市町村レベルの産業連関表の作成には, 地域統計や現地調査等を踏まえた補正や調整が不必要である。本研究ではノン・サーベイ法で得られた表を上述の地域資料で調整し, この連関表を使って与謝野町の経済環境を精査した。分析の具体は, 当該産業部門の生産活動が経済全体に与える影響を示す影響力係数, および逆に経済全体から当該産業が受ける影響を示す適応度係数を以て進められた。結果, 家計外消費支出からの生産誘発効果が最も高く, 商工業部門で付加価値誘発係数が高い数値となることを導出し得た。

**▼ Y03 IR, 14p.**

**Reference** : 黒田 学・中西典子・長谷川千春・野村 実 (2016). 地方分権改革と地域再生に関する調査研究—京都府北部地域における生活福祉とガバナンス—。立命館産業社会論集, **52**(3), 125-138.

**Key Words** : 高齢過疎化, 合併自治体, 地域福祉, 財政状況, 公共交通, まちづくり

**Abstract** : 本研究は, 京都府北部地域, とりわけ与謝野町と京丹後市における生活福祉に焦点を当て, 自治体・行政機関および社会福祉法人等の機関・団体, 関連施設に対する調査を通じて, その現状を考察し課題を洗い出していく調査報告となっている。まず与謝野町は, 与謝野町独自の福祉のまちづくりを推進し, 計画的な投資的支援や行財政改革による弾力的な財政運営が試行されている。他方, 京丹後市では, 高齢過疎化の実情を踏まえて, 公共交通利用の促進を通じた地域住民の交流や地域経済の活性化が追求されている。

**▼ Y04 IR, 33p.**

**Reference** : 佐々木淳 (2017). 昭和初期における丹後縮緬農家の機業活動—伊達善治郎家の事例に即して—。大阪市立大学経済学会 経済学雑誌, **117**(3), 1-33.

**Key Words** : 農家経済調査簿, 伊達善治郎家, 機業活動, 丹後縮緬, 家族労働力, 雇用労働力

**Abstract** : 本研究は, 石川村 (旧・野田川町) で零細機業農家であった伊達善治郎家に焦点をあて, 丹後縮緬業の黄金期ともいえる昭和初期の企業活動を詳らかにした力作である。対象が零細規模であるため, 資料には農家経済調査簿 (個票) が使われた。縮緬製造の主流は零細機業農家であり, その多くでは家族労働力と雇用労働力の工程が分かれ, 生産現場は住居用や農業用の空間が併用されていた。原料生糸の仕入れと製品販売は地元縮緬問屋が担い, 上述した黄金期には生産空間の拡充や織機の増強が図られることになった。

**▼ Y05 IR, 24p.**

**Reference** : 張 明軍・矢口芳生 (2021). 住民満足度の変化に基づく施策評価に関する研究—京都府与謝野町の事例をとおして—。福知山公立大学研究紀要, **5**(1), 37-60.

**Key Words** : 総合計画, 施策評価, 住民調査, 満足度, ベンチマーク評価

**Abstract** : 本研究は, 与謝野町が2011年と2017年に実施した住民意識調査結果をもとにして「住民属性」「活動参加」「施策期待」への住民足度に関して, 経年変化が分かるベンチマーク評価を精査したのち, 結果をもとに与謝野町の総合計画に反映すべく行われたものである。こうして行政側の意図や希望が町民に対して如何に浸透し満足を得ているのかが分かり, 住民側と行政側の双方にとって利点のある総合計画での具体策の立案を効率的に行える。多様な施策を一層優れたものにするには, 定期的な住民意識調査が望まれる。

**▼ Y06 IR, 14p.**

**Reference** : 中西典子 (2013a). 過疎高齢地域の産業と福祉をめぐる小規模自治体と事業者との連携 (上)—京都府与謝郡与謝野町における調査研究をもとに—。立命館産業社会論集, **49**(1), 69-82.

**Key Words** : 過疎化, 高齢化, 地域産業, 丹後機業, 丹後ちりめん, 加悦町

**Abstract** : 本論文は、中西（2013b）とセットになっており地域概観に相当する部分である。ここでは、対象地域の伝統的な地域産業である丹後機業（丹後ちりめん）の略史、さらに与謝野町内の代表的な丹後ちりめん生産地域である加悦地区（現在の重伝建地区の「ちりめん街道」を含む）の地域誌がまとめられている。封建社会である近代において、当地区は上下関係を色濃く残しながらも、福利厚生が相対的に手厚かった。縮緬生産は昭和初期と高度経済成長末期に2度の興隆期があるが、その後は現代まで衰退傾向が顕著である。

▼ Y07 IR, 21p.

**Reference** : 中西典子 (2013b). 過疎高齢地域の産業と福祉をめぐる小規模自治体と事業者との連携(下)―京都府与謝郡与謝野町における調査研究をもとに―. 立命館産業社会論集, **49**(2), 45-65.

**Key Words** : 過疎化, 高齢化, 地域産業, 中小企業振興基本条例, 福祉事業, 小規模自治体, 官民連携

**Abstract** : 中西（2013A）を受けた本論文では、過疎化と高齢化の下で地域産業の振興を図るための小規模自治体の取組や課題が示される。とりわけ与謝野町では、多くの零細事業所（主に織物業等の繊維産業）が生活スタイルの変化で苦境にあるため、町内で多種の業界が良い相互作用を生じるよう「産業振興ビジョン」を立て、府内初の「中小企業振興基本条例」も制定した。なかでも相互の協力関係を築きやすい社会構造を活用した「よさのうみ福祉会」との連携事業や循環型農業の実践など、多くの官民協働の試みが認められる。

▼ Y08 IR, 24p.

**Reference** : 春木和仁 (2010). 京都府与謝野町の地域情報化推進計画のためのアンケート分析. 京都創成大学紀要, **10**(1), 31-54.

**Key Words** : CATV, アンケート調査, 地域情報化, 情報格差, Push型情報, Pull型情報

**Abstract** : 人口が少ない、相対的に収入が低いなど大都市との地域格差を抱えた地方では、地域情報化の推進に障壁が多い。それは、事業自体が商業ベースに乗り難いことにある。与謝野町では公的事業としてCATVの整備を図ったが、アンケート調査の結果、様々な課題が浮上した。有効なCATV運用には、商業ベースに乗せる採算性を考慮して、発信に特化したPush型の運用に加えて、町民から情報を得るPull型の運用が必要である。高齢者世帯に多く残るアナログテレビもCATVとの親和性が低く、改善課題として指摘できる。

▼ Y09 IR, 44p.

**Reference** : 矢口芳生 (2020). SDGs汎用モデルの構築―京都府与謝野町を例に―. 福知山公立大学研究紀要, **4**(1), 255-298.

**Key Words** : 持続可能性, 自然循環農業, 丹後縮緬, 地域資源ビジネス, 工程管理, KPI

**Abstract** : 地域密着型の地域SDGs実現の方法と課題を探った本研究は、地元自治体と福知山公立大学の連携協定の成果である。そこでは「地域の資源循環」「経済循環」「暮らしの向上」という三位一体の取組が尊重され、横浜市の先例をもとに地域内外での協働と地域人材育成の大切さが説かれる。地域SDGs実現のための6W2H（Whenいつ, Whereどこで, Who誰がが, Whyなぜ, What何を, Whom誰に, Howどのように, How muchいくら）という、5W1Hから「対象」と「コスト」に視野を拡大した視点が新鮮である。